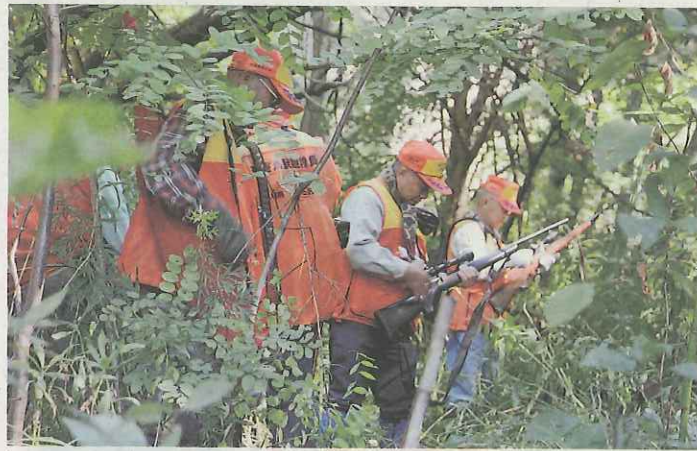




㊤小泉さんが家族や仲間からもらったお守り、クマ鈴、空の葉きょう。「勇気をもらえる」と常に持ち歩く

㊦若いクマの射殺後、ライフルを手に親グマの出没を警戒する「ヒグマ防除隊」のハンターたち
＝9月27日午前10時35分ごろ、札幌市南区真駒内柏丘



意見募集します

この連載に関する意見を募集します。紙面で紹介することがあり、匿名希望の方は明記してください。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を記し、〒060・8711（住所不要）北海道新聞報道センター「クマ取材班」へ。電子メール sapporo@hokkaido-np.co.jp と、ファクス011・210・5556でも受け付けます。23日到着分まで。

前線

札幌市西区に住む小泉要さん(41)は9月26日午後、自宅で夕食の支度をしている時に電話を受けた。「あすの朝、パトロールに出てほしい」。猟友会の仲間は、そう告げた。

小泉さんは昨春、札幌市から委託される「ヒグマ防除隊」の一員に選ばれた。20人ほどの隊員の中で、ただ一人の女性。クマ出沒の知らせがあれば、ライフルを携えて駆け付ける。

27日午前7時。小泉さんを含むハンター4人はライフルを持って二手に分かれ、南区川沿いから真駒内に至る豊平川沿いを見回った。樹木がうっそうと茂る所もある周辺では、クマの目撃情報相次いでいる。登校時間が過ぎた8時半ごろ、車を止めていた藻南公園の駐車場へ戻った。そのとき、仲間の携帯電話が鳴った。「クマが出た」

小泉さんを乗せたオフロード型四輪駆動車は、数分で現場に着いた。取材中の

STVのカメラマンたちが路上にいる。

カメラが向く道路わきの斜面の林で、黒い影がこちらに動きかけた。狩猟仲間とクマを2度撃ったことがある小泉さんは、その正体がすぐに分かった。10メートルほど離れたところから、車から飛び降り、ライフルに弾を込めた。ためらわず照準を合わせる。弾はクマの頭の右側を直撃した。

体長1メートルほど。死んだのは1〜2歳の若いクマと分かると、小泉さんは、涙があふれるのを我慢できなかった。「ごめんなさい……」。

むくろに何度もつぶやく。現場にいた警察官や市職員から「よくやったよ」と声を掛けられたが、「そんな気持ちにならない」。

撃ったのは間違っていない。だが、まだこれだけ

撃ちたいわけじゃない

<上>

■モ 道内のハンター数は減り続け、今年3月末の北海道猟友会の会員5444人は35年前の4分の1で、このうち札幌支部の会員は649人。高齢化も進む中、クマ撃ちの経験があるハンターの正確な人数は不明だ。

札幌市からの委託で猟友会札幌支部が編成する「ヒグマ防除隊」は、射撃技術や経験、人格などを考慮して会員の中から20人が選ばれている。市は、ライフルの弾代や保険料などとして9万6500円を支部へ一括支出。クマ目撃情報

報に基づく捜索やパトロールの際、1人当たり2万円を出動人数分、さらに射撃で駆除した時はクマ1頭につき3万1500円を支払う。防除隊は石狩管内で、千歳市や恵庭市などでも編成されている。

9月27日
クマ射殺現場付近

射殺現場の見取図



動する。

市民の身を守る

最後の手段

か生きていないのに、山に帰してやれなかった。さまざまな思いが、今も小泉さんの中にある。

小泉さんは、夫(56)が営む広告会社で経理担当として働き、小学4年の長男(10)を育てる。1995年にクレイ射撃を始めた。狩猟を始めようとする人へ銃の取り扱いを指導するようになり、自分も経験せねばと、シカなどを撃つようになったのは3年前。

夫からも危険だと反対されたヒグマ防除隊入りの訳を、彼女はこう言う。「クマに襲われると銃がなければ太刀打ちできない。銃を持っている人が市民を守る責任があるから」

「残酷だ」「殺さずに山へ戻して」。市街地近くに出てきたクマが撃たれると、そんな声がわき起こる。批判の矛先がハンターに向かうこともある。

ヒグマ防除に携わる石狩管内の男性(73)は、「積極的にクマを撃ちたいわけじゃない。出動を頼まれて、現場にクマがいなかったときは正直ほっとする」と漏らす。別のハンターの男性も「心情的につらい。誰かがやらなければならぬ仕事。楽しんでやっている人はいないはずだ」。

札幌市の南部や千歳市など石狩管内の人間の生活圏で、頻繁にクマが出没するようになった。恐れ、騒ぐだけでなく、都市部に現れるクマへの対応を冷静に考える。

札幌市の南部や千歳市など石狩管内の人間の生活圏で、頻繁にクマが出没するようになった。恐れ、騒ぐだけでなく、都市部に現れるクマへの対応を冷静に考える。

札幌市の南部や千歳市など石狩管内の人間の生活圏で、頻繁にクマが出没するようになった。恐れ、騒ぐだけでなく、都市部に現れるクマへの対応を冷静に考える。

札幌市の南部や千歳市など石狩管内の人間の生活圏で、頻繁にクマが出没するようになった。恐れ、騒ぐだけでなく、都市部に現れるクマへの対応を冷静に考える。

クマと遭遇した現場で当時の様子を話す大塚啓子さん。「人とクマとの出会いはお互いに不幸。市街地に来ないよう」(できないかしら)札幌市南区石山



雌グマの生息が確認された地点



進入



ヤナギや下草がうっそうと茂る遊歩道脇の林の中に、クマの頭が見えた。目の前2メートル。目と目が合った瞬間、クマは「目と目が合った瞬間、クマは「目と目が合った瞬間、クマは」

川岸の遊歩道 至近距離に頭

日没が迫った川岸に、霧雨が舞っている。9月26日午後5時20分ごろ。札幌市南区の石山を流れる豊平川沿いを、近くに

若いクマは、豊平川の河畔林(メモ①)を伝って迷い込んだと、専門家たちはみている。人の手が入った河川のそばに、木々は茂りやすい。「自然の状態ならば氾濫を繰り返す川沿いに木の根は定着しづらい。上流にダムができ、水量が管理されて氾濫が少なくなると樹林が発達する」北大大学院農学研究院教授の中村太士さん(54)は指摘する。豊平川も1972年、上流に豊平峡ダムが造られてから河畔林が広がったことが、開発局の調査で分かっている。河畔林がクマの身を隠す通り道になっていることは「あまり知られていない」と、北大大学院獣医学研究科教授の坪田敏男さん(52)は言う。「クマは自分の体をさらすことを嫌う。河畔林の下草を刈るだけでも林の中が明るくなって視界は広がり、効果はある」

札幌市内のクマ目撃件数は2011年度から急増している「グラフ」。通り道をしっかりと断たなければ、札幌市街地へのクマの進入は止まらない。周辺の山間

「クマは自分の体をさらすことを嫌う。河畔林の下草を刈るだけでも林の中が明るくなって視界は広がり、効果はある」札幌市内のクマ目撃件数は2011年度から急増している「グラフ」。通り道をしっかりと断たなければ、札幌市街地へのクマの進入は止まらない。周辺の山間

河畔林を伝い市街地へ

〈中〉

有刺鉄線を張った「ヘアトラップ」に入り、自動撮影カメラにとらえられたクマ。2010年9月24日、札幌市南区の豊平市民の森(札幌市提供)



春の駆除廃止 まち出没誘発

初めて雌グマが確認されたのは06年。南区の白川と豊平に計3頭の雌がいた。07年も南区の豊平で新たな

部で、クマたちが増え続けているからだ。頭数を増やし、分布を広げるのに中心的な役割を果たすのは雌グマ。行動範囲が100メートルに及ぶ雄と異なり、雌は数キロ四方にとどまって2〜3年に1度、1〜2頭を産む。道立総合研究機構環境・地質研究本部(札幌)と札幌市が2003年から続けるヘアトラップ調査(メモ②)などによると、札幌市街地に近い山間部で、昨年までの7年間に、少なくとも11頭の雌グマが生息していた。

①河畔林 自然の状態で、上流にダムができると氾濫の機会が減ることなどから、土がたまり草木が生えやすくなる。一般的に5〜10年ほどでヤナギやニセアカシアが生え、10〜20年ほどで林に。鳥類などの生息地としての役割がある一方、洪水時に流木となり橋を傷つける恐れがあり、治水の面からも問題になっている。

1〜2年で母グマと別れた若いクマは好奇心も旺盛で、とりわけ雄は長距離を歩き回る。「まちのすぐ横に雌グマが住むということは、親離れた若いクマが、いきなりまちに『突き刺さる』ということ。いつ事故が起きてもおかしくない」どう対応すればいいのか。次回は、道外の現場を歩きながら考えたい。(上野香織)

雌が見つかかった。08年には、地下鉄東西線円山公園駅から南西に5キロしか離れていない中央区盤渓でも。これまで確認された雌グマ11頭のうち、3頭は駆除など死んだが、残りは生息している可能性がある。調査では雄18頭、性別不明1頭も見つかっている。調査を進める道総研の企画課長、間野勉さん(53)は、雌グマ増加の理由として春グマ駆除(メモ③)の廃止を挙げる。「先人は開拓当初、人里にクマが進入しないよう一丸となって対策を図った。今の札幌市民は、クマが近くに生息していることを知らない。間野さんは心配する。」

②ヘアトラップ調査 クマの生息域に有刺鉄線を仕掛け、付着したクマの体毛を採取しDNA鑑定する。性別や個体の識別ができ、移動範囲や生息数を推定できる。有刺鉄線は地面から約50センチの高さに約5メートル四方に張り、中心部にクマをおびき寄せるための餌をつるす。



先進地 行政が先頭に

意見募集します



クマはそこにいる

札幌市街地へのクマ出没の実情や対策を探るため、18、19、22日の3回にわたって掲載した連載「クマはそこにいる」。都市のすぐ近くでクマたちは繁殖し、親離れした若いクマが人間の生活圏へ容易に入ってくる状況が浮かび上がった。このままでは「いつ事故が起きてもおかしくない」と、専門家は警鐘を鳴らしている。クマの生態に詳しい2人に有効な対応策を聞くと共に、連載に寄せられた読者の意見の一部を紹介する。

(上野香織)



さとう・よしかず 東京出身。東大大学院博士課程修了。日大准教授を経て、今年4月から現職。専門は野生動物生態学。十勝管内浦幌町の周辺でヒグマの生態や被害を調査中。北方四島の白いヒグマも研究している。42歳。

酪農学園大准教授 佐藤喜和さん

クマは自然死亡率が低く、道内でもじわじわと増えています。札幌の市街地に近づくクマを花火などで追い払っています。いま発信器を付けているクマは24頭。夜に別荘地近くでドンクリを食べています。捕獲したクマに発信器を付け、夜間の行動を監視し、人の住む地域に近づくクマを花火などで追い払っています。いま発信器を付けているクマは24頭。夜に別荘地近くでドンクリを食べています。捕獲したクマに発信器を付け、夜間の行動を監視し、人の住む地域に近づくクマを花火などで追い払っています。

「防御ライン」押し戻そう

を、市民に示す必要があり。市街地への出没を防ぐには、クマに対する「防御ライン」を人間が山側に押し戻す必要があります。人が山際で活動すれば居心地が悪くなり、クマは寄りつかない。山梨県では、山際の住宅地でクマを誘因する柿の実をもぐエコツアーを実施しています。札幌でも山際での大規模なキノコ狩り大会や、木を切る間伐ツアーなどを企画したところでしよう。狩猟者が山に入ることも、人を恐れるクマが増えるので効果的です。

すみ分け議論 いまこそ



たなか・じゅんぺい 兵庫県出身。松山大学卒業後、オホーツク管内斜里町の臨時職員となり、ヒグマ対策を経験。その後、北大大学院修士課程修了。01年に、クマ対策を進める長野県軽井沢町のNPO法人「ピッキオ」に加わる。39歳。

クマ対策のNPO法人職員 田中純平さん

長野県の軽井沢町で、NPO法人の一員として、行政から委託されてクマ対策を進めています。いま発信器を付けているクマは24頭。夜に別荘地近くでドンクリを食べています。捕獲したクマに発信器を付け、夜間の行動を監視し、人の住む地域に近づくクマを花火などで追い払っています。

十分な知識の共有が大切

軽井沢で働き始めた2001年は、市街地のごみ置き場に餌付いたクマが多く、怖いくらいでした。ここで共存が図れるのかと心配でしたが、においが漏れにくくクマが開けられないごみ箱を考案し、04年から町内に46台を置いたところ、1999年に129件あったごみ被害は、09年以降はほぼゼロになりました。このごみ箱は道内でも函館などに6台設置されています。札幌でも出没の多い南区や西区で導入してはどうでしょうか。

読者の意見は…ハンターの苦悩知る／駆除反対／入山者増やして



⑮18、19、22日に掲載した連載「クマはそこにいる」の紙面⑮24日までメールとファクス、手紙で寄せられた読者の意見

連載へ読者から寄せられた意見は22件で、クマの駆除や警戒に当たるハンターの思いを紹介した「ハ上V前線」に6割が集まった。市街地へクマを近づけない取り組みを進めてほしいという声も目立った。

「クマを撃つて苦しんでいるハンターがい」とは考えたことがなかった。残酷だと苦情を言う市民は、現実を知ることが大切だと思

「ハ上V前線」(18日掲載)は、クマ出没時の駆除や警戒にあたるハンターの活動を紹介。9月に札幌市南区でクマを射殺した女性ハンターが胸の内を語った。

連載の内容

豊平川の「河畔林」をて来る可能性や、市街地の山林に居着いた雌が繁殖を続けている状況説明。「ハ上V対策」日は、クマ対策に行動を取り組む長野県例を追った。